

# 大念佛

No.85

発行／融通念佛宗  
総本山 大念佛寺大阪市平野区平野上町1-7-26  
TEL.06-6791-0026

題字：融通念佛宗 管長 吉村暉英



前日までは梅雨を思わせるような天気が続いていましたが、仏天のご加護であります。天に届くような青空のもと、新命暉英大僧正が開門の詞を述べられ、山門での儀式が厳粛に行われました。

そして雅な樂の音とともに本堂に入堂。各宗派代表など、多くの招待者、各界関係諸氏、末寺僧侶等で満堂となつたなか、晋山式の法要が勤修されました。

吉村暉英大僧正は長く宗務総長を勤められ本宗の発展に貢献されました。また教学部門でも豊富な知識で末寺僧侶を育ててこられました。

第六十六世倍嚴良舜猊下を「慈」とすれば、暉英猊下は「智」となり、新たな融通念佛宗が生まれるのではないかでしょうか。

※晋は「晋」、山は「寺」を表し、とを指す。

平成三十一年一月十二日、融通念佛宗管長、総本山大念佛寺第六十七世法主に就任させていただきました。そして令和元年六月十八日、晋山式勤修に当たり、宗内外多数のご臨席のもとに、新命法主の就任と前途を祝福し、力強い励ましを頂戴致しました。紙上をお借りし厚くお礼申し上げます。

法要に臨み、諸仏諸尊のご加護に衷心よりご恩報謝のまことを捧げ、法要に臨み、諸仏諸尊のご加護に衷心よりご恩報謝のまことを捧げ、これにはご縁をいたでいるすべての人びとのご支援ご協力のお陰に思いを馳せました。しみじみとした喜びと感謝の気持ちが満ち溢れ、感慨も一入でした。

この上は宗門と総本山護持發展のため、さらには仏法興隆のため、及ばずながら微力を尽くして参りたいと思つております。

人はこの世の中に、それぞれの使命を持つて生まれてくるといわれています。それはすべての人はみなこの上ない大切な存在であるということです。私たちの開祖良忍上人は「一人一切人 一切人一人」の御文によつて人間関係の中に、皆ともに仏の道を歩むことによって喜びと感謝の和平樂土を築くことをお教えになり、比叡山の伝教大師は「一隅を照らす」ことの大切さを説かれ、またある修行者は、「ひとりにはひとりにしかない光がある」といつて人間の尊厳さを教えられました。

融通念佛は融通和合の教えであります。それぞれの人が、それぞれの立場において、それぞれの使

命に生きるところに、潤いのある世の中になる。そこに拌み合い、支え合い、ゆずり合いが生まれます。それはまた喜び合いであります。感謝し合いの生活でもあります。そこを融通念佛なむあみだぶのあたかいお念佛で包み込んでいく。まさにこの念佛こそが私たちを喜びと感謝の世界に導いてくれるのです。

歴代上人は代々、現実生活の中に息づく念佛を受け継ぎ、これを伝えてこられました。

管長としての一番の使命は、これに尽きるものであると信じます。そのため機会あるごとに、その教えの弘通に努めてまいりたい思いでおります。

融通念佛宗規の中に、布教伝道として「親教」の一項があります。親教とは管長が檀信徒の人たちに親しく説法教化を行うことです。さて今の時代は電子機器のめざましい進歩によつて、日々の生活が大きく変わり、大きな恩恵をもたらしました。しかし反面、心の荒廢を嘆かざるをえない様々な事件が続出しています。宗教は人びとの心の分野に融けこんで、それを耕すことが求められています。僧侶も檀信徒も一体となつて、念佛の輪（和）を広げていくことが大事であります。

檀信徒各位の絶大なるご支援とご協力を願い致します。そしてが共に安らぐことのできるよう精進していくことが、宗門人に課せられた責務であると信じます。

**新管長挨拶**

**「心あたたまる念佛の弘通を」**

融通念佛宗管長 吉村暉英

# 光 求めて

宗務總長 田中 瑞修

六月初旬、自坊の中庭では遅咲きの紫色の石楠花が満開のときを迎えておりました。一月下旬雪を

ります。耐え忍ぶ身と心を整えるならば必ずやその後には喜びの世界、しあわせの世界にいたることがであります。

ある権家の次男で田舎より出て事業をなさつていた方がありました。この方は商才にたけ高度成長の波

なく可憐な花を咲かせてくれたものだと感動したのを思い出します。

「踏まれても根強く忍べ道芝のやがては笑う春はくるらん」

耐え忍びやがて来る春を待つ一草一本に私どもの日常生活と重ね合わせ、人の人生も同じ姿ではないかと思いを新たにいたしました。

お釈迦様はこの現世をシャバ世は忍土、耐え忍ぶ世との意味であ

にも乗り多方面に事業を拡大され、事業家として名をはせた人であります。しかし、その絶頂期に脳梗塞で倒れ入院、病院生活を送っている時バブル崩壊を受けて会社は倒産。その後数年が経つて本人が亡くなる事態となり残されたのが奥様と小学四年生の息子、自宅も人手に渡り借家住まいの中で主人の葬儀をしなければならないこととなりました。奥様からの電話

仏跡参拝を終えて

平成三十一年三月二十八日(一月八日)

吉村  
明山



「行つてよかつた」。仏跡参拝から帰国し、月日が流れるにしたがつてその思いがますます強くなります。参拝中は慌ただしく気持ちも高揚していたので、じっくりとお釈迦様に想いを巡らせることができませんでしたが、帰国して数か月が経ち、日増しにお釈迦様への尊崇の念が強くなつてしまります。この度、伊藤義祐師、森田尚宏師、村尾竜圓師とともに十二日間の日程でインドの仏跡参拝に行かせていただきました。**サールナート↓**

リダガヤ→ラージギル→バイシャ  
リ→クシナガラ→ルンビニ→スラ  
バステイの順番に七か所の聖地を  
参拝いたしました。インドという  
国のスケールの大きさに圧倒され  
ながらも、お釈迦様の足跡をたど  
りつつ感じたことは、「やはり仏  
教はお釈迦様の教えだ」というこ  
とです。日本の様々な仏教を学ぶ  
うちに、お釈迦様の存在が多くの  
仏様と混ざってしまい薄れていま  
したが、昔と変わらぬ山や河を見  
て大地を踏みしめることでお釈迦

A photograph showing four men in traditional black Buddhist monastic robes standing behind a large, multi-tiered golden stupa or reliquary. The stupa is made of numerous small gold-colored blocks stacked in a tiered pyramid shape. They are standing on a brick platform, with a larger brick wall visible in the background. The scene is shrouded in a thick fog or mist.

祇園精舎にて

いっぱい働き、働いて溜めて、溜めた物を皆な返していきました。短い人生を走り抜けた人でしたが本人は満足していることでしょう。けれども私にはいろんなことが残りました。これも主人が私に与えた試練と受け止めこれから頑張つてまいります」と気丈に語られ、後日中陰で自宅にお参りさせていただいたおり、祀つてある仏壇の立派なのに驚き、「立派な仏壇で

の中でも祀つてもらえるものだとの  
おもいを込めて買っててくれたもの  
手放すことはできませんでした。  
今のは不釣り合いの仏壇です  
がこれも主人が息子にこの仏壇の  
見合家に住むようにとの宿題を  
残してくれたのだと受け止めてお

すなあ」と申しますと、「これは主人が生前に買つておいたものです家の物を処分する時、業者がこれも買い取らせてもらいますと言つたのですが、主人が亡くなればこ

ました」と涙されていました。人ら羨まれるような生活より一転、金に追われる日々、主人も家ももすべて失い一人の子供の成長夢を託して生きてこられ、今日再喜びの中にあるこの奥様をみると、「何事も修行と思いする人は身の苦しみは消えはつるなり」との詩が浮かんでまいります。あの石榴花が凍てつく冬を耐え忍んで、満開の時を迎えます。

れません。子息はその後卒業、就結婚と順調に歩まれ今年は初孫授かり、夢にまで見た日を迎えられました。彼岸に寄せていただいた時には孫を抱き、「長いようしたが今、思い返せば昨日のこのようす。この日を迎えるられたのも仏様、主人、多くの方々の力いただき守つてもらつたお陰で苦労のお陰で普通の人が孫を抱よろこびよりも私はその二倍、三それ以上の喜びを与えていただ

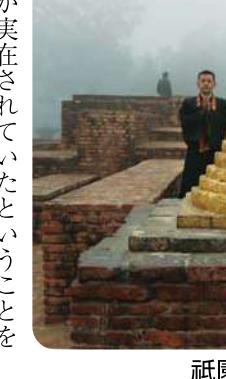
A group of people, including monks and laymen, gathered in a courtyard for a ceremony. They are seated on the ground under a large tree, with many wearing white robes and orange sashes. The background shows a building decorated with garlands.

A detailed botanical illustration of two clusters of pink rhododendron flowers. Each cluster contains several flowers with distinct yellow stamens in the center. The flowers are a vibrant pink color. Below the flower clusters are several green, serrated leaves.

「行つてよかつた」。仏跡参拝から帰国し、月日が流れるにしたがつてその思いがますます強くなります。参拝中は慌ただしく気持ちも高揚していたので、じっくりとお釈迦様に想いを巡らせることができませんでしたが、帰国して数か月が経ち、日増しにお釈迦様への尊崇の念が強くなつてまいります。

この度、伊藤義祐師、森田尚宏師、村尾竜圓師とともに十二日間の日程でインドの仏跡参拝に行かせていただきました。**サールナート→**

バスティの順番に七か所の聖地を参拝いたしました。インドという国のスケールの大きさに圧倒されながらも、お釈迦様の足跡をたどりつつ感じたことは、「やはり仏教はお釈迦様の教えだ」ということです。日本の様々な仏教を学ぶうちに、お釈迦様の存在が多くの仏様と混ざつてしまい薄れていましたが、昔と変わらぬ山や河を見て大地を踏みしめることでお釈迦

リ→クシナガラ→ルンビニ→スラ  


真理にいかなる隔ても無いのだ」とお釈迦様に教えて頂いたような気がいたしました。実際にお釈迦様が旅をされた道筋をたどらせてもらうなかで、今まで触れてきた日本仏教の中での神格化されたお釈迦様像とはまた違う、人間としてのお釈迦様を感じ、親しみの念が増しました。

ブダガヤでは、大塔の西側にそびえる菩提樹の周りに世界中の仏教徒が所狭しと座り、お経を唱えられています。私たちも座り、般若心経をお唱えしたのですが、自分が仏教実践の心でした。本来なら

分の唱えるお経の声と、周りの方の唱える外国语のお経とが混ざり合つて聴こえた時、「人種・国籍・言葉が違つても、眼前の菩提樹の根のように元は一つの教えである真理にいかなる隔ても無いのだ」とお釈迦様に教えて頂いたような気がいたしました。実際にお釈迦様が旅をされた道筋をたどらせてもらうなかで、今まで触ってきた日本仏教の中での神格化されたお釈迦様像とはまた違う、人間としてのお釈迦様を感じ、親しみの念が増しました。

「このように言われる言葉に全てを受け入れ、過去にとらわれるこなく先の光を求めて歩む前向きな姿に心を打たれました。それ以降負債の処理、子育て、生活とさまざまな苦労を重ね、子息が大学に入学された時には、「少し前に光が見えてきました。もうひと踏ん張り鞭打って頑張ります」と笑顔で話された安堵の表情が忘れら

れません。子息はその後卒業、就職、結婚と順調に歩まれ今年は初孫を授かり、夢にまで見た日を迎えたしました。彼岸に寄せていただいた時には孫を抱き、「長いようで短い」と思いました。私が今、思い返せば昨日のことのようです。この日を迎えたのも仏様、主人、多くの方々の力をいただき守つてもらったお陰です。

苦労のお陰で普通の人が孫を抱くよりも私はその二倍、三倍

よろこびよりも私はその二倍、三倍

の花も咲くまでは、一朝一夕簡単なものではありません。自然の試練に耐え忍びやがて喜びの春を迎えるのです。私たちの人生も山あらり谷あり、春夏秋冬を通らなければなりません。いかなる苦しみに遇おうとも逃げることなくこれが試練修行と受け止め、来る春を信じ花を咲かせたいものであります。



